

2011 年度春季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会 合同研究発表会
(大阪大学言語文化学会 第39 回大会)

発表要旨 (言語文化学会会員分)

第1室 (E棟101教室)

小説における登場人物の性格について
—小説を理論的に分析する試み—

伊藤 啓 (言語文化専攻博士後期課程)

本発表は、小説における登場人物について、〇〇は～な性格だ、～な人物だ、とその性格を分析するための一つの方法論を提案するものである。まず小説内の人物描写について論じている文献をいくつか紹介する。それを参考にして、性格の分析対象とする人物 (A)・その他の人物ら (B)・客観的な第三者、の3つの視点と、性格・心理・風貌・行動・会話や発言・環境や経歴、の6つの描写内容を組み合わせた計18通りの叙述が、Aの人物描写においてなされ得ると仮定した。

続いてこの仮定に基づき、実際のテキストとして筒井康隆『文学部唯野教授』を取り上げ、主人公である唯野の性格について具体的分析を行う。唯野についての叙述部分が、それぞれ18通りの人物描写のどれに該当するのかを考えて一つ一つ分類を行い、そこから総合的に考察して、唯野は～な性格だ、～な人物だ、という結論を出す。また、Aのみ・BのみによるAの性格判断だけでは客観的正確性が保障され得ないことを明らかにした上で、第三者の視点からによる性格描写や心理・行動・会話などAの他の描写内容を参考にしつつ、幅広い角度からAの性格を分析・考察することの重要性を述べる。他にも、Aによる自身の性格判断とBによるAの性格判断が異なる場合や、複数いるBらの間でAの性格判断が異なる場合、地の文が「私は～」で一貫して描かれる私小説の場合などについても言及する予定である。

分析の結果唯野は、饒舌な性格であり軽薄な言動をしがちな人物であり、同時に友人思いの優しい面もあり、また自らの職業に執着する自尊心・権力欲の強い性格でもあることが明らかとなった。直観に頼り表面的な読みになってしまいやすい小説を分析するという作業について、先行研究の理論に基づき、一貫したやり方で行う方法論を具体的に示すという点に、本発表の大きな意義があると言えよう。

背景の異なる初対面者同士の会話データにみるフッティング —研究者と全盲視覚障害者のケース・スタディー—

中原 京子 (言語文化専攻博士後期課程)

本研究は、背景の異なる日本語話者二者間の初対面会話におけるフッティングを取り上げ、それが相互行為においてどのように働いているのかを、グラフと文字化の両方のデータを用いて可視化し、コミュニケーション論・社会言語学・ポライトネスの観点から分析を行うことにより考察し、聞き手を重視した言語行動がどのように行われるのかを提示しようとするものである。

今回発表するのは、初対面の日本語話者で、大学病院勤務の医学系研究者 40 代女性 KI と中途失明の 30 代女性 KU の会話データについてのケース・スタディーである。両者の背景事情のうち、年齢、職業、所属コミュニティ、社会的地位の相違から、Power (相対的権力) が一方的に偏ることを既成観念上、予想した。

しかし、KI が小学生の子どもの母親という共通項をもとに、方略的にフッティングを選択し直し (フッティング・チェンジ)、会話中に Power が一方的に強くならないように配慮することで相手への FTA を回避し、一方で KU が相手から既成観念の「全盲者」のステレオタイプで見られることを回避するため、一人称代名詞を使い分けることによりフッティングを選択し直し、自己への FTA を回避しているのがみられた。それ以外にも、話題の主導権取得時、話題の中間部、話題の終結部のターン・テイキング・マネジメント (Mey 2001) に、KI、KU がそれぞれ、聞き手を配慮すると同時に自己のフェイスを保つために行う言語的ポライトネスがみられた。

今回のケースでは、聞き手重視の配慮行動が、社会的に Power の強い者が弱い者に合わせてフッティング・チェンジを行うといった一方向のものではなく、双方向のものであることがわかった。つまり、参加者が方略的にフッティングを選択し直し、相手に受け取られたいフッティングを提示しながらも円滑にコミュニケーションが行われるよう配慮している一つの良い例であるといえる。

中国語母語話者による日本語の漢語形容動詞の習得 —「ナ」と「ノ」に対する選択を中心に—

黄 瑩 (言語文化専攻博士後期課程)

中国語において、漢語の語幹を持つ形容動詞の中には形だけではなく、機能としては同じく「事物の性質や状態を表す」語として使用されている語が数多く存在する。「唯一」や「完全」といった語はその範疇に属する。しかし、以下のような文を日本語母語話者(以下、母語話者)が聞くと不自然に感じるだろう。

- (1) 彼にとって音楽は唯一な友達である。
- (2) 私はこの病院で完全の治療を受けた。

本発表は「唯一」や「完全」といった語を「漢語形容動詞」と定義づけ、それが連体修飾語として使われる際に出てくる中国人日本語学習者(以下、学習者)の「ナ」と「ノ」に対する選択状況について考察する。

学習者の「ナ」と「ノ」に対する選択状況を考察するため、学習者の 128 名においてアンケート調査を行った。そして、同時に母語話者の 112 名において調査を行った。

調査結果として、学習者の「ナ」と「ノ」の選択は多様であり、調査票に扱われた何れの語も「ナ」を選択する人、「ノ」を選択する人、「両方とも使える」を選択する人がいる。選択に戸惑っている傾向が見られた。そして、母語話者が「ナ」に対して明確な選択傾向を示した語の中に、学習者は極めて低い「ナ」に対する選択率を示した語がある。例えば、公平[ナ]裁判(46.9%)、正確[ナ]時刻(35.2%)、純情[ナ]少年(27.3%)などがある。

今まで、学習者の「ナ」と「ノ」の選択に困難をもたらした原因を 3 つの角度から検討を行った。まず、漢語形容動詞の教育を施す際に説明が足りず、「ナ」と「ノ」に対する選択に恣意性を学習者に持たせると思われる。次に、母語としての中国語の負の転移があると考えられる。そして、漢語形容動詞には「名詞」と「形容動詞」の品詞性を同時に持つ語が数多くある。二種類の品詞性が絡み合うことにより、「ナ」と「ノ」の選択に困難をもたらしていると思う。得られた知見は、中国の日本語教育における漢語習得に示唆を与えられると考える。

在日チャイニーズ・ディアスポラにみるアイデンティティのあり方 —映画『新宿インシデント』の考察を通して—

李明 (言語文化専攻博士後期課程)

映画『新宿インシデント』(2009)は、監督イー・トンシン自身のおよそ 10 年間にも及ぶ構想を映画化した作品である。1990 年代初頭の日本の新宿・歌舞伎町を舞台に、密航でやって来た中国人の男たちが裏社会で生きていく姿を描いている。密入国者たちは、暴力団の力を借りて日本社会の最下層の労働者から最大の華人集団になり、合法的な身分と生存空間を獲得するにもかかわらず、金銭、権力、欲望のはざままで、それまでの自己のアイデンティティを見失ってしまう。

ロビン・コーヘン (Robin Cohen) は民族別の特徴に応じてディアスポラを 5 つに分類した。それらは犠牲者としてのディアスポラ、帝國的ディアスポラ、労働者のディアスポアラ、そして文化的なディアスポラである。映画『新宿インシデント』の密入国の男たちは、労働者のディアスポラだと言える。本発表では、より良い機会や環境を求めることを目的とする労働者としてのディアスポラが直面する不法な身分、仕事、言葉、文化の違い、異国での同郷人とのかかわり、差別などの問題に注目しつつ、彼らにどのような独特なアイデンティティが形成されるかについて考察したい。具体的には、主人公の鉄頭 (ティエ

トウ)と彼の同郷人である阿傑(アージェ)の関係を中心に分析を行う。

祖国を離れて新しい土地に渡り、さらに時間が経過するとともに、ディアスポラのアイデンティティがいかに変容していくかを把握することは、彼らを理解する上で重要である。映画に示される密入国者の表象は、その考察の可能性を提供してくれる。

第4室 (E棟104教室)

中国の義務教育における国際理解教育の現状と展望

—教材とカリキュラム分析の視点から—

潘 英峰 (言語文化専攻博士後期課程)

グローバル化の進展に伴い、国家間の交流が加速している。子どもに対する国際理解教育の実施も、学校教育の中で一層重要視されるようになってきている。近年、中国においても、国際交流が頻繁になり、国際理解教育も重要視されるようになった。しかし、受験勉強が中心である中国の教育では、国際理解教育課程が展開できる学校は限られている。国際理解教育を実施している学校では、どういった学習環境を整え、どのような指導方略のもとに授業を展開しているのだろうか。そこで、本発表では、教材とカリキュラムの分析を通して、中国S市の国際理解教育の現状をまとめ、その特徴を明らかにする。

調査分析の結果、教材の内容は、地域文化を中心円にして、中国文化、世界文化へと徐々に拡張していき、それらは、「我々の地球村」、「我々の祖国」、「世界へ」シリーズ、「人類の共同な資源」、「世界と私たち」などの内容により具現化されている。そして、選題一探究—まとめといった段階に分け、異文化理解、人権理解などの学習領域を含む特設課程と外国語フェスティバルや、海外見学や、ほかの学習科目との連携などの手段と結び付けて、国際理解教育課程を実施していることが明らかとなった。しかし、単なる世界知識学習や本土文化の軽視化など、目標設定と矛盾していることも分かった。本発表は、中国人生徒の国際理解教育の意識形態を探究することの基礎付けになるであろう。さらに、日本の学校に在籍している中国人ニューカマー生徒への支援体制の策定にも一つのヒントを与えると考えられる。

言語獲得の過程におけるモニターとフィードバック

森本 圭子 (言語文化専攻博士後期課程)

私は、事例研究(1990)を行う過程で、被験者の男の子(1歳6か月から1年間)が、彼の言語を獲得する過程において、自分がすでに獲得した文法規則に基づき、常に彼の発話をモニターし、かつ、その発話を自分の文法規則に適合させ、発話を再生するという彼の発話のデータを収録した。

例えば、彼は、 (1) ノンノ バス (乗る バス) と、最初に発話した後すぐに、
(2) バス ノンノ (バス 乗る) と、自分自身で修正し発話した。

私たちは、(1) から (2) の生成過程から、2つの問題を提議することができると考えられる。

1. (2) から (2) の発話を生成するのにどのような規則が働いているのか
2. もし、ある規則が (2) から (2) の生成過程で使用されていると仮定するならば、その規則は、他の言語においても同じように働くのか。

ここでは、上で述べた問題点をさらに、日本語と英語のデータを使用し、Chomsky の U.G. (1986) の観点から考察する。

その結果、子供はその子供の言語獲得の過程において、その子供の発話を常にモニターし、そして、その発話を自分がすでに獲得した文法と照らし合わせて、もし必要なら、その発話を修正し、意味の伝達を行うように思われる。又、日本語の構造は、S (主語) + O (目的語) + V (動詞) で、動詞が最後にあるので、動詞だけを変えることにより、文を次々につないでいくことが可能であり、かつ、日本語には主語 (は、が) や目的語 (を) や所有 (の) を表す助詞が在る為、意味を伝達する時に、文の構造に依存する必要がない。一方、英語の構造は、S (主語) + V (動詞) + O (目的語) で、意味伝達の際には、構造に依存する (Chomsky:1975)。それゆえ、英語の発話者が発話の意味を変える時は、動詞がフィードバックポイントとなり、動詞を言い換えなければならないように思える。

ICT を活用した英語教育の実態

奥田 阿子 (言語文化専攻博士前期課程)

メディア教育開発センターの調査 (2008) によると、ICT 活用教育の導入率は、国立大学で 95.9%、公立大学で 77.6%、私立大学では 79.4%と大学設置者別で見ても非常に高い割合で ICT が導入されている。

英語教育における ICT の活用は、1960 年代から LL 教育で使用されており、その頃の使用機器はカセットテープが主流であった。コンピューターの一般普及に伴い、1980 年代以降からは CALL システムの開発が行われた。スタンドアロン CALL からネットワーク CALL へ移り変わり、その後、2000 年頃からは e ラーニングも盛んになった。コンピューター以外の ICT 機器は、JACET 教育問題研究会 (2005) で、教育機器を①聴覚機器 ②視覚機器 ③視聴覚機器の 3 つに分類され、CD プレーヤー、フラッシュカード、DVD、PC など機器の名前を挙げている。しかし、菊池 (2007) では、「モバイルテクノロジーを使ったモバイル学習 (m-learning)、PDA、ポケット PC などのモバイル機器との融合が進行しつつある」と述べているように、現在では、使用される機器は 2005 年に比べて多岐に渡っている。

本発表では、ICT 機器がどのように英語教育に関わってきたのか歴史の変遷を述べると共に、現在から将来までの展望を考えていきたい。現状の調査として、英語を学んでいる大学1年生から4年生までを対象にアンケート調査を行い、英語学習におけるICTの活用の実態を考察する。また、新たなICTの動向を提示しながら、現状と比較し、将来のICT教育について探求を試みたい。

参考文献

1. 菊池俊一 (2007) 「m-learning における携帯電話使用の可能性」, 『名古屋外国語大学国語学部紀要』 第32号, pp.55-85.
2. 独立行政法人メディア教育開発センター (2008) 『eラーニング等のICTを活用した教育に関する調査報告書 (2008年版)』 独立行政法人メディア教育開発センター

FL 環境で外国語習得に成功する学習者の学習環境整備

—ニュージーランド人日本語学習者を対象として—

吉田 ひと美 (言語文化専攻博士後期課程)

生涯教育としての外国語学習という認識の高まりにより、教室内の学習活動から教室外の学習活動領域を対象とする研究の必要性 (Benson, 2001)や、第二言語 (SL) 環境だけでなく外国語 (FL) 環境における教室外での学習活動 (Freeman 1999, Pickard 1996)に目が向けられるようになってきている。さらに、インターネットやテレビ、ポップ・カルチャー、目標言語母語話者との接触場面の増加により FL 環境における教室外の学習活動が多様化に伴い、学習者が FL 環境で得られる学習リソースの活用のあり方を考えていくことが必要であると考える。

本研究は、FL 環境において目標言語の学習に成功した学習者が、教室内外を含む学習体験から、どのような学習リソースを活用し、学習環境整備を行うのかを探求する。調査協力者は、英語母語話者のニュージーランド人日本語学習者のうち、日本留学経験がなく日本語学習に成功した学習者2名を対象とした。調査は、協力者が日本語学習に関連付けられる出来事や想いのマインド・マップを作成し記憶を思い起こした後、ライフ・ヒストリーの手法で、過去の日本語学習経験を思い出せる範囲で語ってもらった。インタビューの音声データをもとに、学習成功者がいつ、どのように、誰/何と関わり、どのような学習環境を選択的に整備しているのかを考察した。結果、学習と使用という観点から、日本語との接触が限定的である FL 環境にしながら、学習成功者は SL 環境に近い環境づくりを積極的に行うことが観察された。さらに、FL 環境にいる日本語母語話者との日常的接触、タスクと実際の使用を通して自己の言語能力の上達をモニターするだけでなく、あるリソースへのアクセス数や接触が減少した場合、それに代わる補完的リソースを利用するなど、リソースをモニターする傾向があることも窺われた。